

保育計画成果報告書

法人名等	社会福祉法人 福芳会
施設名	光の森武蔵ヶ丘保育園
報告者（役職）	塚本 洋史（副園長）
住所・連絡先	熊本県菊池郡菊陽町武蔵ヶ丘3丁目50-2
	☎ 096-337-4651
	E-mail hikari-musashigaoka@orange.plala.or.jp

○タイトル（保育計画）

賢く・逞しく・元気な子どもを育む

○主な助成備品

- ・安田式テクノロマン低鉄棒
- ・安田式テクノロマン吊り輪
- ・安田式テクノロマン平均台
- ・安田式テクノロマンカラーマット（4枚セット）



1. 保育計画策定の目的

住宅街にある園庭の狭い保育園で、効率よく、怪我の少ない逞しい園児を育てる為に、持ち運びしやすい安田式遊具を使ったサーキットや体育遊びを通して、怪我をしない安全な体をつくるため。また、きちんとしたルールの下で行うことで順番を守ったり、できない子に声がけをするなどの気遣いも学んで欲しい。

2. 具体的な実施内容

春は2階にある人工芝の屋上に鉄棒や平均台を置き、ぶらさがりなどの初歩的な遊び方で遊具に慣れながら、体を動かす楽しさを覚えてもらうことに努めた。雨の日はホールにマットを敷き、平均台や鉄棒も含めた簡単なサーキットをすることで、晴れた日と同様に体を動かす事ができた。鉄棒は高さの違う3種類を購入したので、園児の成長につれて高さを変えていった。



↑人工芝（屋外）に設置した時の様子



↑ホール（室内）に設置した時の様子

夏には鉄棒、平均台、マットを園庭に移動し、運動会にむけた本格的なサーキットに励んだ。以上児は逆上がり、上手な子は連続逆上りに挑戦。安田式遊具は設置の安定感はあるのに軽くて持ち運びが簡単なため、季節、用途により設置場所を簡単に変更できたので非常に助かった。販売元であるエール株式会社から講師も招いて研修を行い、子どもの興味を持続させるようなサーキットの方法も学んだ。

秋、園庭が狭いため運動会は近くにある姉妹園で行ったが、その際もトラックに積んで簡単に運ぶことができた。場所が変わってもいつもと同じ器具でサーキットをすることができ、子どもたちの安心に繋がった。



姉妹園の園庭に設置した時の様子

設置式の吊り輪は園庭に配置し、まずはぶら下がることから始めた。単純な「ぶら下がる」という粗大運動で筋力を鍛え、慣れてきたところで体を横に大きく揺らしたり、徐々に次の吊り輪へと飛び移るという協調運動へと変化させることで、子どもたちの心身の発達を図った。



折りたたみ式のマットは畳んだ状態では一畳ほどの大きさになるので、持ち運びしやすく重宝した。運動時のマットとしてはもちろんのこと、未満児のブランコの下やクライミングの際に敷くセーフティーマットなど様々な用途に用いた。

3. その成果と評価

総括として、保育計画に掲げていた「賢く・逞^{たくま}しく・元気な子ども」という目標は達成できたと思う。

昨年、旧園舎の狭い園庭ではぶつかり、怪我をする子どもが多かったのだが、1年間のサーキットを通して、子どもたち同士が動きを予測し衝突を避けることができるようになった。転んでも手を出して身を守れるようになっているので大きな怪我につながることも無かった。

■子どもの成長の具体例

4月の時点で4～5歳児の中で逆上がりができたのは、4人だったのが、運動会までには11人ができるようになっていた。そのうち2人は連続逆上がりもできるようになった。マットを使った前回りも全員できるようになった。これまでは鉄棒にぶら下がることしかできなかったのが、非常に大きな成長が見られたと思う。

(逆上がりができた子)	4月	10月	連続逆上がり成功
4歳児クラス(18人)	1人	4人	1人
5歳児クラス(23人)	3人	7人	1人

平均台は実は他社のものと比べると低く設計されており、子どもが怖がらず挑戦できた。足を揃えて左右交互にジャンプする「忍者飛び」も低い平均台なので安心して取り組むことができ、4、5歳児の全員が飛べるようになっていた。

また、本来の用途ではないが、写真撮影や外での休憩の際は長椅子としても使えて重宝した。

吊り輪は当初、難しく諦める子どもも多かったが、徐々にできる子が増えていき、それを見た子どもが再度挑戦する姿も見られた。「できないことができる」ようになるいい体験ができたと思う。また、ルールを明確にすることできちんと順番を守る、他の子の動きを観察するといったこともできるようになっていった。

4. 今後の課題と展望

今回購入させていただいた器具を使った運動遊びを日々継続し発展させていきながら、子どもたちの体幹、バランス感覚を育み、個々の運動能力及び安全能力を高めていく。

そのためにも以下の3つの項目に取り組んでいく。

①保育士の指導力の向上

子どもたちが飽きずに運動遊びを継続、展開していくためにも、運動遊びの内容を発展させていく必要があるため、まずは保育士の指導力の向上を図る。保育士同士による情報交換や研修会などを経て新たなサーキットのやり方を学び、子どもたちの動きをよく観察し適切なタイミングで褒められるよう努める。

②発達の連続性の確保（0歳～5歳）

年齢・発達に沿った計画や目標を立て、それを達成できるような適切な運動遊びに取り組む。定期的に成果報告をすることで職員同士が計画や目標を共有し、成長に合わせた発達の連続性の確保に努める。

③仲間との共感力を育てる

今年度は主に個々の能力を育むことを中心としてきたが、来年度からはサーキットなどで他の子どもを応援したり、できない子を教えてあげたり、転んだ子を気にかけてりして仲間との共感力を高めて欲しい。

以上